

平成26年度

第2回 札幌市児童発達支援研修会（専門研修）

発 達 支 援

－ 将来を見通し、安心感を大切にした関わり－

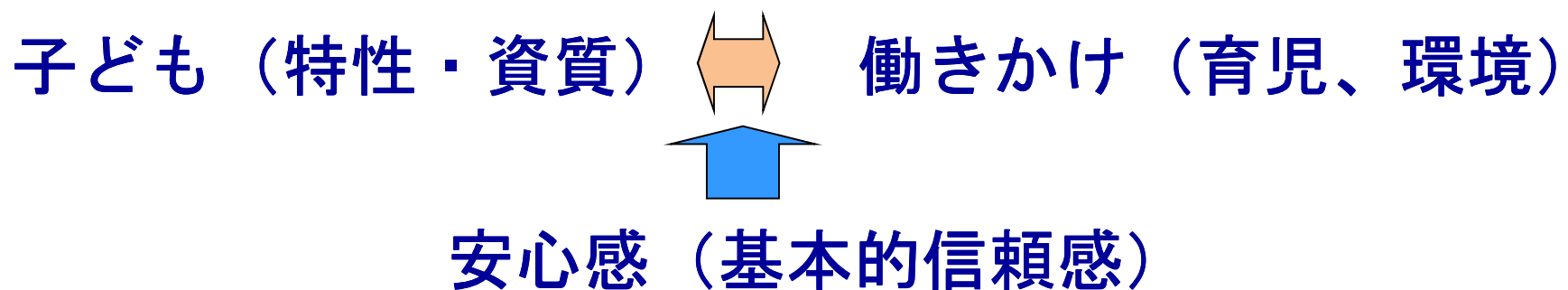
平成 年 月 日

〇〇児童発達支援センター△△

発達支援

発達

子どもが親や他者との**安全感や安心感(基本的信頼感)**を基に、**子どもの特性**に応じた周りからの**働きかけ(育児・発達支援・環境調整)**を取り込んで、現在の姿からより**新しい姿**を獲得すること。



発達の原因(子どもの発達の特徴)

1, 発達の源は親や人との信頼感 (安心感) から、育っていく

子どもは親(主に母親)との安心できる関係を通して、相互の一体感や信頼感を生み出し、情動の共有を基盤として、次の遊び(やり取り)への期待感を抱き、遊び(やり取り)を広げていく。

* 安心感 → 自己主張 → 自己調整(自己統制)

- 初期の関わりでは、親や支援者は子どもの要求をできるだけ受け入れ、付き合い、共存することの楽しさを体験する。
- 親(支援者)は自分にとって‘必要な人’‘大切な人’という意識を育て、“心の支えとなる人の形成”を促す(情動の共有)。
- その後は、要求の受け入れから、色々な遊びや活動を一緒に楽しみ、相互のやり取りをじっくり、ゆっくりと関わり、大人側の価値感を伝え、関わりを重ねる。

発達の原因(子どもの発達の特徴)

2, 発達の順序性 (同じ発達の道筋を歩む)

→前の段階での発達は、それに続く後の発達になんらかの影響を及ぼす (例) 運動の発達, ことばの発達.

3, 発達の方向性 (中心から末端へ)

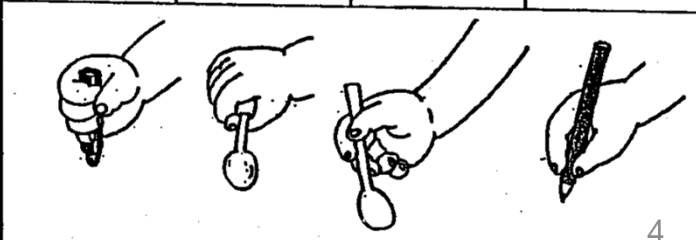
(例) 体幹から手指へ, 手指機能の獲得.

- ことばの獲得(順序性)

発声 → 喃語 → 繰り返し語
→ 身振り(サイン言語) → 単語発声 → 一語文発話 → 二語文発話 → 動詞・形容詞発話(多語文)

○ものの握り方の発達過程

| 握り | 手掌回外握り | 手掌回内握り | 手指回内握り | 3指握り |
|--------|----------|---------|---------|---------|
| 年齢 | 1~2歳 | 2~3歳 | 3~4歳 | 4歳以降 |
| 動きの中心 | 肩, 肘関節 | 肘関節, 前腕 | 前腕, 手関節 | 手指, 手関節 |
| 必要な安定点 | 体幹, 首の安定 | 肩の安定 | 肩, 肘の安定 | 前腕の安定 |



4

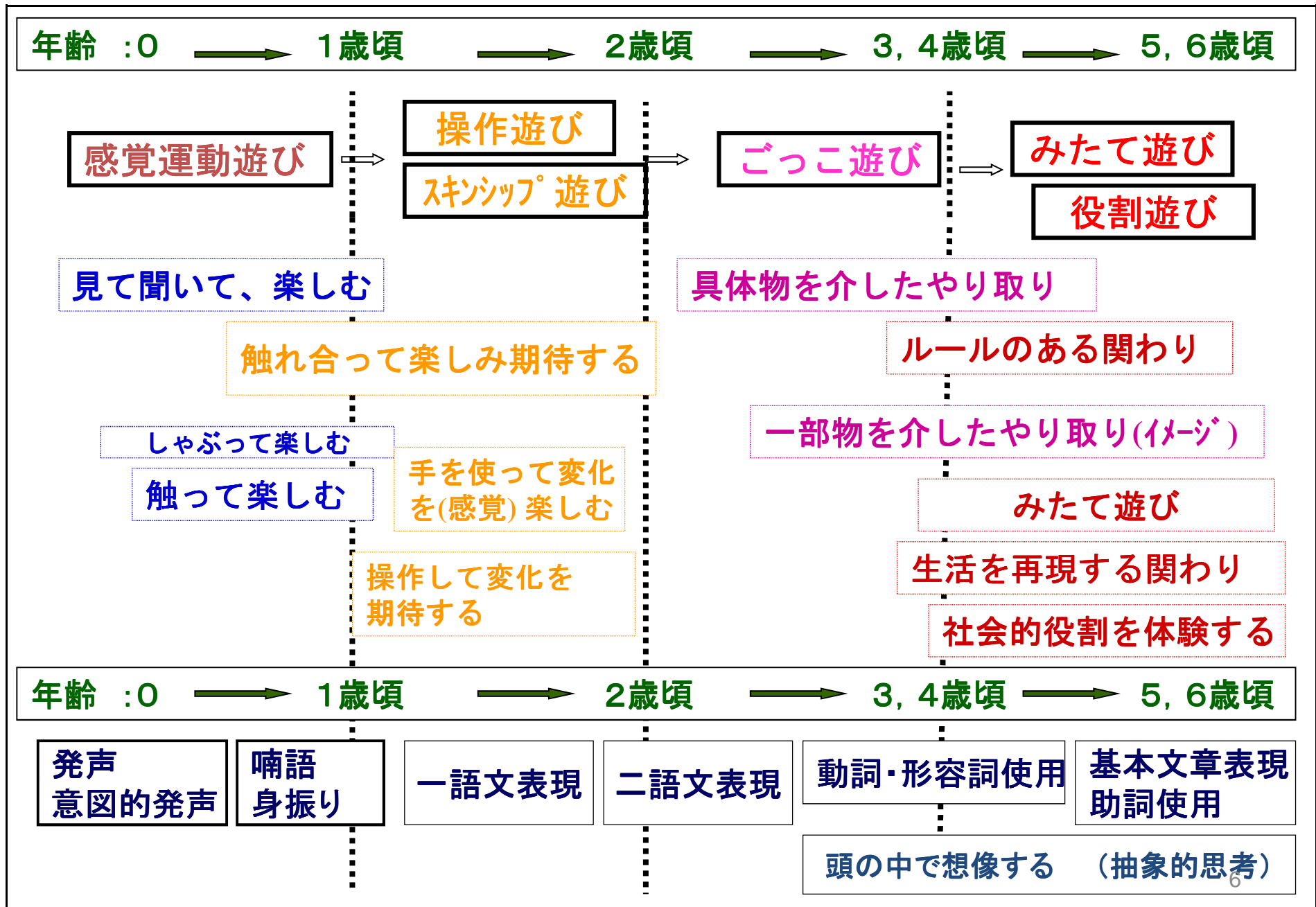
発達の原因(子どもの発達の特徴)

4, 発達の相互の関連性

(それぞれが関わり合って意味をもち、変化していく)

- ことばの獲得に関連する要素
 - ア. コミュニケーション意欲 (通じ合う心のやり取り)
 - イ. 豊かなことばの世界の充実 (ことばを介した豊かな交流体験)
 - ウ. 理解力 (理解, 覚える, 興味, 関心等)
 - エ. 模倣力 (真似して表現する)
 - オ. 聴く姿勢 (気持ちを向け、持続して意図して聴く姿勢)
 - カ. 聴き分ける力
 - キ. 構音、発声器の向上 (かむ、のみこむ、なめる、ふく、すう等)

遊びの発達 (発達の順序性と相互の関連性)

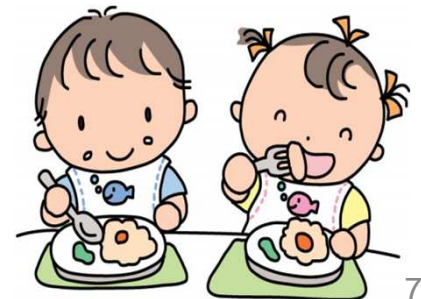


生活リズムをつくりましょう

早寝 早起き 朝ごはん

- 7:00 起床 朝食 「おはよう」「いただきます」
- 10:00 あそび 外あそびが大好き「こんにちは」
- 12:00 昼食 自分で食べる意欲を育てましょう
- 15:00 おやつ 時間を決めてテーブルで
- 18:00 夕食 入浴 夕食後はゆっくり過ごす
- 20:00 就寝 21:00までには寝ましょう「おやすみ」

- ① 朝起きる時間を決める
- ② 3食の時間を決め、一定にする
- ③ 外遊びやお散歩で体を動かす
- ④ 夕食後は興奮させない



日常の健康管理と環境づくり

～発達支援が必要な子どもたち～

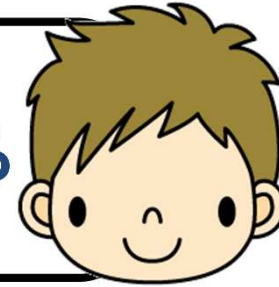
- コミュニケーションが困難なため、自分からサインをだせない
保護者からの情報と観察で把握
- 脳性まひや重症児は、「上手に嚥下できない」「呼吸がうまくいかない」ため医療的ケアが必要な場合がある
- 体温調節などの生理的基盤が未熟
- 服用している薬の影響を受けている
- 感染症にかかりやすい



- ①良好と思われる健康状態を把握「いつもと違うに気付く」
体温 顔色 呼吸 意識(睡眠) 皮膚 活気 食欲 排尿 排便 体重の変化
- ②複数の人で確認する（保育士、指導員、看護師など）
- ③経時的に観察をする（活動・食事の前後、1週間等）

子どもに安心感をもってもらうためには

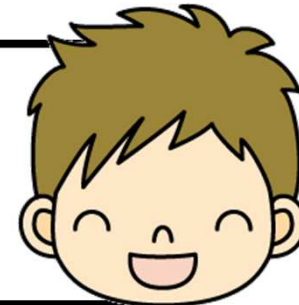
様々な個性や特性があるこどもたち



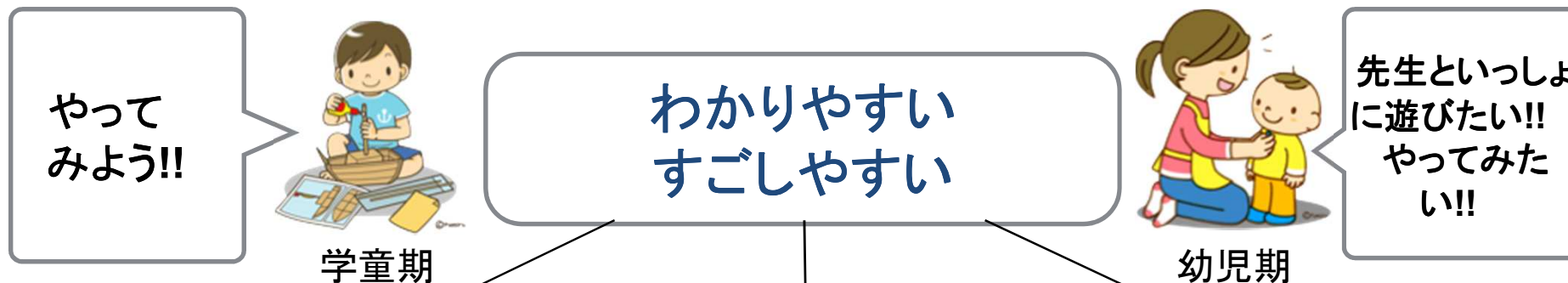
こどもによりそい、共感し、良いところを褒める
+
環境面や伝え方の工夫



- 人への信頼感
- 安心して過ごす
- 達成感、自信、自己肯定感



安心感をもってもらうための具体的な工夫のポイント



①環境の整理

- ・活動にあった場所
- ・気になる物を目隠し
- ・お互いに使いやすい環境

※感覚の特異性にも配慮

②見通しをもたせる

- ・一日の流れ
- ・活動の中の流れ
- ・いつまで、
どれくらい

※必要な見通し量

③伝える工夫

- ・見える化する
- ・情報整理して伝える
- ・肯定的に伝える

①環境の整理

活動にあった場所



気になる物がない!!

気になる物を目隠し



見えないことで集中力UP!!

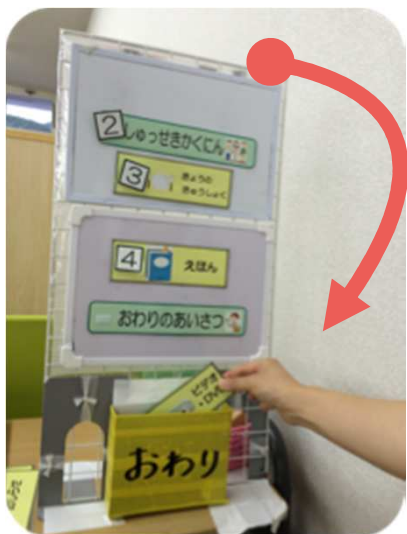
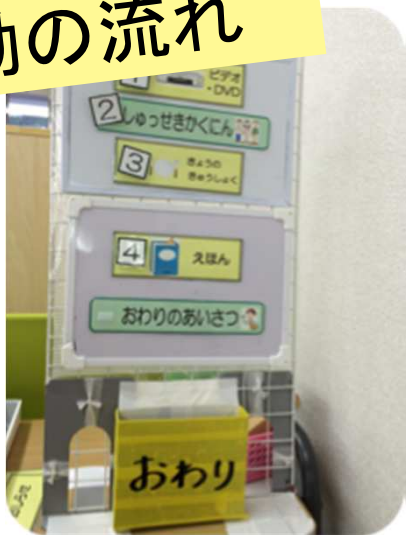
お互いに使いやすい環境



スッキリ!!

②見通しをもたせる

活動の流れ



いつまで、どのくらい



手順の流れ



③伝える工夫
見える化



肯定的に伝える



情報整理



情報整理



学童期の特徴と支援

学童期の発達の姿

不安もいっぱい

できる？
できない？

幼児期の
信頼関係



自発性
積極性
目的性



ものを成し遂げる

ほめてもらえた！
認められた！



自己肯定感
自尊心

生産性の感覚
(sense of industry)

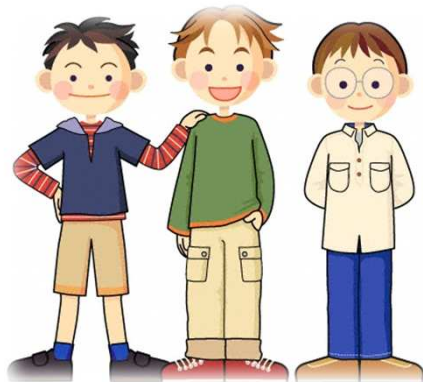


放課後等デイサービスの役割について

生産性の感覚・取り柄



- ☆成し遂げるよろこび
- ☆友達・大人に褒めてもらうよろこび



親離れへの挑戦

：大人になるにあたっての大切なことは、友達・仲間の存在

- ☆孤立をふせぐ
- ☆仲間の存在
- ☆グループ活動



放課後等デイサービス

変化の大きい思春期の特徴を理解し、
様々な活動を通して子どもの育ちを保障する場

社会スキルの獲得 学力支援 様々な体験

(指示に従う 許可を得る いいえを受け入れる 助けを求める 落ち着く)

★教育との連携 – 役割分担

家族支援 自立に向けて子どもの育ちの変化
育ちにくさ、**巣立ち**にくさを感じて
いる**家庭への支援**

地域連携 二次障害など子どもの困り感を収束
できる環境を作り、**地域連携**しながら
子どもを支援

肢体不自由のある子どもの支援

◆ 遊びを楽しめる快適な心身の状態を準備する

機嫌が悪く、筋緊張（筋肉のこわばり）が強くなる原因は？

- 生理的要因：眠気 空腹 便秘
暑い、寒い 痛い など
- 心理的要因：不安 怒り
やりたい、いやだという気持ち など
- 病的な要因：熱 痰 下痢など

肢体不自由のある子どもの支援

◆ 安心して介助を受けてもらうためには？

☆準備状態をつくる

(心身ともに触れられる準備が必要)

①視野に入る ～ 適切な方向・距離・表情・態度

②声掛け ～ 適切なタイミング・トーン・スピード

③触れる ～ ゆっくり・手掌や身体全体で

☆ 目的の動作（遊び、着脱、入浴…）によって
身体のどの部分から、どの程度というのは変わる

肢体不自由のある子どもの支援

☆介助する時の基本

- ゆっくり動く方向に、相手の運動を利用して
勢いや反動をつけない。（おむつ交換や着脱、遊び）
- 身体をくっつけて一緒に動いて
手のみの力で行わない
- 筋緊張と力比べしないで
一旦その動きに合わせてリラックスする
のを待ってから
- 背中を伸ばして支持点（安定
させるところ）をはっきりと
坐骨部（お尻の骨）に体重をのせる
- 子どもにもたれない
子どもの肩に介助者の腕の重みや体重をかけない



肢体不自由のある子どもの支援

■ 抱き方の例

1、横抱き

①悪い例



介助者が自分の身体に引き寄せている。体幹と下肢が捻じれ、膝で体重をぶら下げている。

②良い例



外側の太ももを持ち、お尻と背中とで体重を受け、体幹と下肢が平行になっている。

2、たて抱き

①悪い例



頸や下肢、全身が突っ張ったまま。

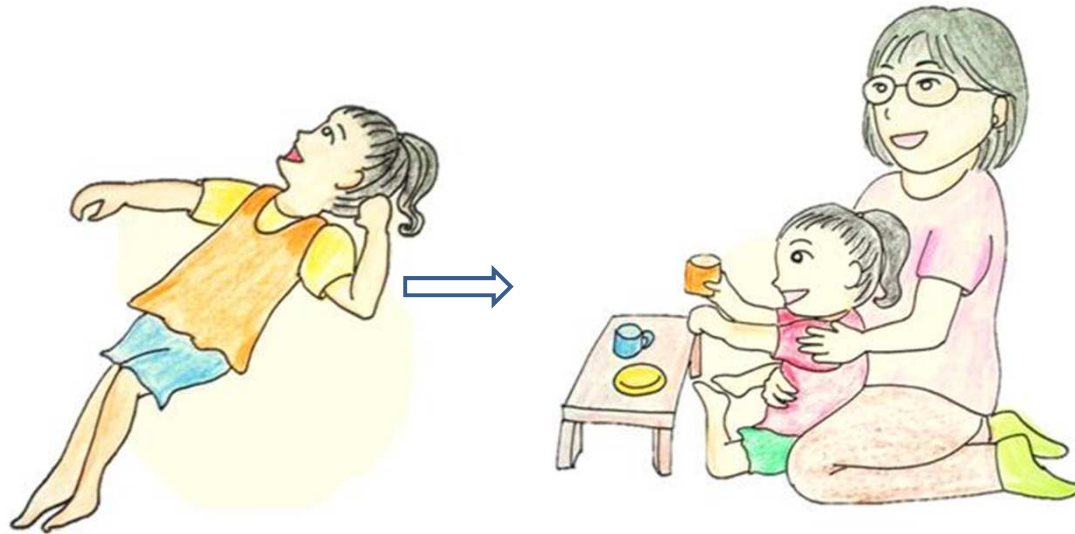
②良い例



股関節と膝関節を曲げ、お尻に手を当て体重を受けて、お互いの身体を密着させる。

肢体不自由のある子どもの支援

■ 遊ぶ時の介助例



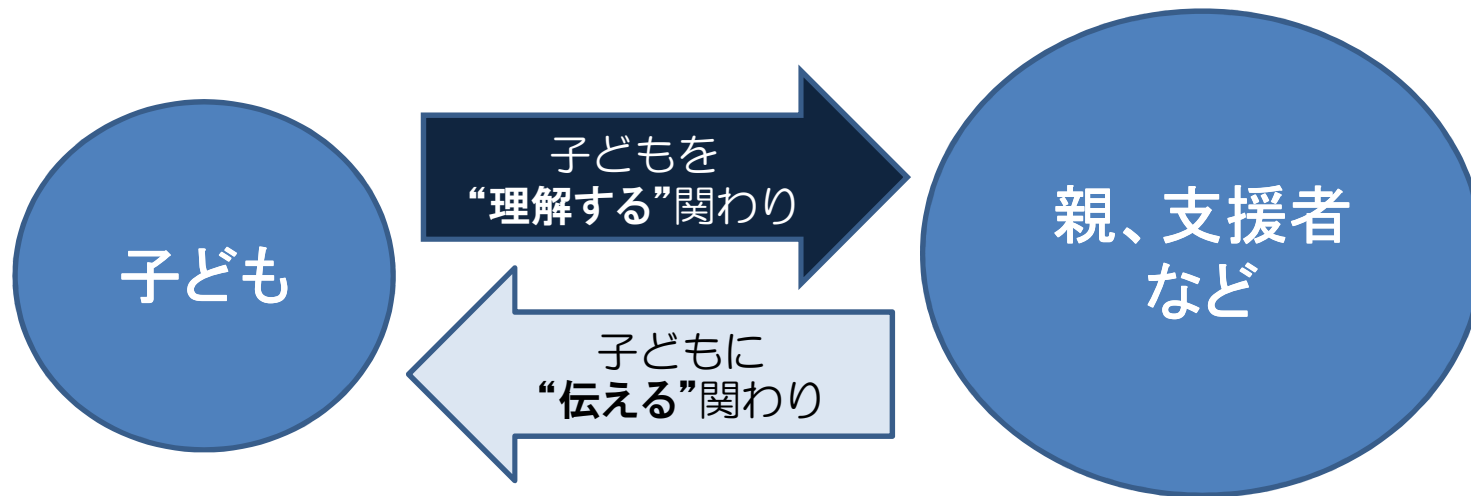
あぐらの時、お尻の下に低い台を入れると背中が丸まりにくい。介助者の両太ももで子どものお尻まわりを、手で下腹部を支える。
子どもが手を前に出そうとしているときは、肩から前に出すように手助けをする。

- 活動に気持ちを向けることができない物理的要因を理解し、解消に向けて努力する。
- 気持ちを体が安心できる状態・環境を整える。
- 身体や動きをサポートすることで、自分で「できた」という経験を積み重ねる。

⇒社会とかかわりを持って生きていくことの支援につながる。

精神発達(心の成長)

- ・精神発達 ≠ 知的能力(IQ)
- ・他者と心が通じ合う経験によって子どもの心は成長する



- ・精神発達の支援が必要な子は心を通わせることが苦手。
 - ①他者に自分をわかってもらおうという働きかけが不得意
 - ②“伝える”関わりの意図を理解することが苦手

子どもが理解しやすいように“伝える”
子どもがうまく伝えられないことを“理解する”という対応が必要

“伝える”がうまくいかない時 (支援がうまくいかない時)

～伝える側(大人)の要因～

- 教える、させる、という気持ちが強いつ
⇒子どもが自分の出来ない部分を認めることが前提になる
- 子どもの発達の状態に合っていない時
⇒赤ちゃんに字を書かせることをしないのと同じ

～受け取る側(子ども)の要因～

- 興味・関心が大人(他者)に向かない時
⇒興味・関心が向くものからは刺激を吸収しようとする
- 子どもの気持ちに余裕がない時
⇒安心できる状態にないと刺激を吸収できない

子どもを“理解する”関わりをまずやってみましょう

“理解する”が大事な理由

- ちょっとイメージしてください。
あなたは何年も飼っていたペットを先日亡くしました。
友人にそのことを話したところ...

「忘れるしかないよ」「新しいペット飼えばいいんだよ」

「あなたが悲しいのは脳科学的に言うと、〇〇が過剰に働き...」

「そうだったんだ...
寂しいね...」

※いずれの対応も、ペットが亡くなった事実は変わりませんが...
どの対応が一番心地良いでしょうか？

- 大人の“わかろうとする関わり”によって、子どもは安心できる。
- わかろうとしてくれる人に関心が向くようになる。

誰でも赤ちゃんの時は、自分の状態を大人に理解してもらわないと生きていけない。大人がまず理解してあげることが必要²⁰

子どもを理解するために

- 診断名で子どもを決めつけない

診断名だけでは子どもにどう対応することが望ましいか分からない(インフルエンザとは違う)

⇒一人として同じ子どもはいない

- 様々な角度から子どもを理解することが大事

- 行動観察(行動の前後関係をよく観察する)
- 情報共有(知り得た情報を支援者が共有する)
- 状況把握(子どもが置かれている状況を知る)

子どもの理解と対応

＜子どもが示す行動をどのように理解するかで対応が変わる＞

- 怒りっぽくてすぐに他児に乱暴してしまうAくん

今すぐAくんの行動を
変えないと大変！

教える、させるという意識が
対応に強く出てしまう
⇒効果的ではない

どうしてこんなことする
んだろ？よく見てみよう

自分で玩具を使っていて上手く使えない時に怒り出すことに気づいた。また、自分の遊びを邪魔された時に他児に乱暴することがわかった。

この子は人に頼ることができないんだ。嫌な状況を自分で解決しようとした結果が、かんしゃくや乱暴になるのだろう。

- ・対応の目標：子どもを見る視点 ⇒ 他者を頼ったり、耳を傾けたりできるか。
- ・一人でうまくできないことを大人が援助して達成できれば、“援助を受ければ上手いく”という認識ができてくるだろう。そうすれば、他者を頼ったり、大人の話に耳を傾けてくれるだろう。

まとめ

- 発達支援をするためには、その子の発達と心の状態を理解することが大切
 - ⇒ 苦手さ・困難さとできる部分が見えてくる
- 問題行動を示している時には“子どもが何か困っているのだろう”という視点で理解するとよい
 - ⇒ 問題行動には、苦手さ・困難さが隠れている
- 子どもの苦手さ・困難さがわかると、支援の必要な部分が見えてくる
- 子どものできる部分がわかると、それを活かした支援ができる(褒める、認めるかかわり)

まとめ

子どもの理解



支援技術(介助方法、視覚的援助など)の習得



子どもが“わかった”“できた”という
達成感・自信をもてるような支援

- ※ 安心して環境と触れ合うことができ、自ら環境に働きかけるようになる。(発達の促進)
- ※ 子どもの将来を見据えた時に、自信をもって生活するための糧となる。

グループワーク

構成

- ・〇〇名1グループ

約束事

- ・対等、尊重、守秘義務、質問自由

内容

1. 事業所紹介:

- (1)名前、(2)所属、(3)経験年数、(4)職種、
(5)事業所の雰囲気(どんな子が利用している?、特徴)

2. 発表と記録者を決める

3. グループワーク

- ・子どもへの発達支援の状況と感想